

としても、過去のものと、僅かに耕作形態に名残りがみられるにすぎない。軍事制を一のメルクマールとしているマックス・ウェーバー（『経済と社会』）が遺記であるが、時代を劃する新武器がつねに外國からもち込まれた点は、日本史の発展において一考を要しよう。

紙数の都合上、はなはだ簡略に述べたが、日本史研究における幾つかの問題を、ク西船東馬クの観点から述べてみた。文化的には日本の選境に位して、論言は的で遠見もものが多いが、知られない。然し、少くともク瀬戸内海クという重要な交通路の役割が、これほどの日本史研究の上にあつても放置されたことは明らかである。そして北九州と畿内との結節点として、先史・占代より中世に至る、永い間、西部瀬戸内ニク西船クの威力を誇つた二國（東九州）の先進性、後進性、とが絡みあう地域的特性をこの様な角度から、なほ考察してみたいと思つてゐる。それはまた他日を期したい。（九州社会の地域性については宮本又次博士の『九州經濟史における特殊環境』一九州社会、經濟史における地域性なる論文がある）。

### 新著紹介 立川 輝 信

#### 増村隆也著 佐伯郷土史

著者の提唱による毛利高標公百五十年祭を記念する爲に本書を刊行されたとのこと、上巻第一章上代、奈良、平安時代、第二章鎌倉時代、第三章吉野朝時代、第四章室町時代、第五章安土桃山時代、下巻第一章江戸幕府創業時代、第二章江戸幕府隆盛時代、第三章江戸幕府衰亡時代、第四章現

代、に分つて各時代別に郷土佐伯を廣き視野の下に説き、附録として引用文献と書目系図、年表を添えてある。（昭和廿六、四、廿九、佐伯史談会刊、洋紙六判、上一九七頁、下二二六頁、計四二〇頁）

#### 大隈米陽著 豊前國佐田郷土史 上

本書の下巻は他日郷土史談や史料集として出版されることになつてゐるので、上巻とはいへ大体に於て完本と云つてよい。即ち第一章総説で位置、面積、境界区劃、人

口、地勢、氣候を、第二章佐田郷沿革では第一節考古学上の我が郷土より第二六節兵事に至るまで、種々の角度から年代順に郷土の歴史を説き、第三章神社志、第四寺院志、第五交通及通信史、第六城趾、第七名所旧蹟と口碑伝説、第八郷土文芸史、第九古塔碑文化と我が郷土、第十碑文集、第十一人物志、第十二郷土史談、第十三佐田郷土史年表の各章に分ち、更に節を設けて説いてある。（昭和廿七、三、十、佐田村公民館刊、洋A五、二六〇頁、三〇〇頁）